
野口小蘋の人物画における明清絵画の影響について

野口小蘋(1847~1917)は幕末から大正時代にかけて活躍し、明治37年には女性初の皇室技芸員に任命された特筆すべき南画家である。

美術史において明治時代の美術は新派を中心に語られ、旧派に属する南画は軽視されてきた。しかし、近年の明治美術を再考する機運の中で、その認識は改められてきており、小蘋の画業も再検討されつつある。平成17年には山梨県立美術館で野口小蘋展が開催され、彼女の画業が概観できるようになった。学芸員の平林彰氏は小蘋の画業を人物画、花鳥画、山水画に分け、それぞれの展開について述べている。しかしこの論証は概略的な画業の把握にとどまり、作品の具体的な検証に踏み込んでいない。特に人物画への論及は限定的であり、浮世絵からの影響が指摘されているものの、南画家である小蘋がどのような中国絵画から影響を受けていたのかという基本的な問いかけはなされていない。そこで本発表では、小蘋の人物画に見られる明清絵画の影響を論じ、美術史における小蘋の人物画の位置付けを試みる。

また、明治美術は日本の伝統絵画を革新し発展させたものとして語られ、中国からの影響は等閑視されてきた。しかし、当時の画壇では中国に題材を採った作品が多く見られ、中国文化への関心が高かったことは明白である。小蘋の人物画における明清絵画の具体的な影響を検証し、明治時代前半における明清絵画の影響を受けた日本美術の一樣相を明らかにしたい。

小蘋は明治10年頃まで浮世絵の影響を受けた和美人を描いており、南画的な背景や文人趣味を描出することで、中国的な趣味を提示している。明治10年代後半に入ると、中国を志向する表現は唐美人の描出へ移行し、仕女図の影響を受けた作品が制作されるようになった。小蘋は数点の仕女図を模写しており、その図様を自身の作品に転用していることが確認できる。さらに、中国から輸入された粉本である『芥子園画伝』からの顕著な影響も見られる。

また、小蘋は図像を転用する粉本主義的な制作のみならず、交流のあった人物の肖像も描いた。書家日下部鳴鶴の肖像画である《日下部鳴鶴像》では、顔貌表現に写生を取り入れていることは明らかであるが、その一方で表情は穏やかかつ理知的に理想化されていることが見て取れる。

この傾向は美人図でも同様であり、仕女図の影響を受けた女性像も写生を取り入れた理知的な顔貌を持つ。卑俗なものを取り払い理想化するこの表現は、近代絵画における特徴の一つである。近代美術の誕生、発展は新派における伝統絵画の革新を中心に語られるが、旧派における明清絵画の影響を受けた小蘋作品にも、近代絵画の胎動を確認できる。